

ラグビーフットボール指導者のゲーム中における「観察視点」

三宅 隆史 勝田 隆

キーワード：ラグビーフットボール指導者、観察、ゲーム中

Observation points in a game of Rugby football Coaches

Takafumi Miyake Takashi Katsuta

Abstract

This study was focused on "Observation", that is the beginning of coaching behavior. Especially, this study was investigated about "Observation points" of Rugby football coaches who observed to be aimed for technical improvement of players and tactical improvement of a team in the coaching field. For a concrete method, we performed the interview that used a video picture for 33 rugby football coaches.

The results were summarized as followed.

- 1) They aimed in the defense side than the offense.
- 2) They aimed in a game mainly on contest situation.
- 3) Subjects of long coaching experience aimed in many plays and situation at same time.
- 4) The subjects who aimed in the defense side was focusing on a game with own coaching principles.

Therefore, it was thought that this study could be the fundamental document which improved "the power of observation" of many rugby coaches.

Key words : rugby football coaches, observation, game

1. はじめに

1. 指導者の役割

スポーツ活動を行う競技者やスポーツ愛好者の活動を支援するスポーツ指導者(以下、指導者)の役割は、多様である。このことに関して、日本体育協会発行の公認

スポーツ指導者養成テキストⅣにおいて、公認スポーツ指導者が担う役割を、「スポーツを通じて人間としてのマナー、エチケットなど豊かな人間性を涵養すること」と謳っている。また、日本ラグビーフットボール協会発行の「コーチングの指針」での記述は、「グラウンドの

中でも、外でも幸せになるように導く」とある。これらの記述は、指導者の役割において、「競技者の人間性や価値観の育成に関与」するものであることを意味している。

一方、指導者の重要な役割の一つとして、競技者やチームにおける「技術や戦術に関する能力向上への関与」に関するコメントも多い。ラグビーフットボール（以下、ラグビー）元日本代表監督の平尾⁽⁴⁾は、「なぜ選手に指導するかといえば、単純に「うまくなること」、そしてそれが、チームそのものの戦力強化につながっていく」と指摘している。さらに、ジム・グリーンウッド⁽⁵⁾は、「個人技術における誤りを見出し矯正するたびごとに、より大きな満足をプレーヤーに与えるだけでなく、より冒険性に富んだチームプレーを可能にします。コーチが目指すプレーヤーの冒険性の限界は、プレーヤーの技術的能力によって決定されます。したがって、技術的なパフォーマンス向上のためのこの種のコーチングは、コーチの仕事の中で重要な位置を占めます」と述べている。

以上のように、競技スポーツにおける指導者の役割は、多岐にわたっていて、その中心的な役割として、「競技者の人間性や価値観の育成への関与」と「技術や戦術向上への関与」が考えられる。

2. 指導者に必要とされる能力や資質

指導者における適切な役割を果たすために必要な能力や資質について、勝田⁽⁶⁾は、「(スポーツ)指導は人と人との営み」と考え、その営みを円滑に行うために、コミュニケーション・スキルが重要であるとしている。そして、このコミュニケーション・スキルを高めるポイントを、①「観察するための鍵」、②「耳を傾ける時の鍵」、③「尋ねる時の鍵」、④「受け入れるための鍵」、⑤「提案する時の鍵」、の五つに分類したうえで、それぞれ指導者に必要とされる能力について言及している。中でも「観察するための鍵」においては、「良い面を探すことを優先する」「固定観念を持って観察しない」「小さな変化を見落とさない」「目的を持って観察する(見ようと意識する)」などを指導場面においての重要な要素であると、具体的に述べている。さらに、勝田⁽⁶⁾は、指導者のコミュニケーション能力を発揮する場面には、相手としっかりと向き合うことが可能な場面(相手が動いていない場面)、相手(競技者)が運動している場面(相手が動いている場面)、個人を対象にする場面、集団を対象にする場面、などがあり、それぞれの場面において、異なったスキルを発揮する必要があると指摘している。

以上のようなことから、指導者がその能力を発揮する場面は、多面的であり、それぞれの場面において適切な指導を展開するため、指導者は、知識だけではなく、多

様な資質や能力、技術や体力を備えていなければならないと考えられる。

3. 「観察すること」の重要性

指導者に必要とされる能力や資質は、多岐にわたっているが、その基本となる能力や資質の一つとして、「観察すること」があげられる。文献上で散見される記述を列挙すると、ジム・グリーンウッド⁽⁶⁾は、「すべてものを解く鍵は観察することから始まる」と、吉井⁽¹⁰⁾は「技術を見る目」をもつことこそ、技術指導における望ましい最も基本的な能力である」と、ブライアン・ジョーンズ⁽¹¹⁾は、「プレーヤーの潜在的な天分や特性を見抜く力はコーチに必要不可欠である」などがある。これらの記述より、指導者にとって競技者やチームを「観察」することは、指導行動の原点であると考えられる。

4. 「観察」の定義と「観察力」の養成方法

「観察」という言葉の定義や意味についての文献も、多く散見できる。松田⁽¹²⁾は、「観察とは『見る』ことである。もちろんこれは単なる感覚的需要を意味しているのではなく、高次中枢の複雑な動きと一体となった認知活動を意味している」と、金子⁽⁷⁾は、「観察は単に『見る』という行為でなく、運動から何か問題点を見つけ出す『見抜き』が中核機能となる」と述べている。

これらより、本研究では、「観察」を、何をしているのか、また何を意図しているのかということ把握する認知活動と定義し、研究を進めることとした。そして、指導行動の原点である指導者の「観察行動」に焦点を当て、特にラグビー指導者が技術や戦術向上を目的として「観察」している視点について調査をした。

II. 研究目的

本研究は、多様な局面やプレーが連続的に、かつ一瞬のうちに現れ、多様に変化するラグビーゲーム中におけるラグビー指導者の「観察視点」に着目している。そして、ラグビー指導者が「ゲーム上で繰り広げられる競技者らの技術や戦術を観る」場合、どのような視点を着目しているのか、という以下の五点についての検討を行った。

- ① ラグビー指導者がゲーム内の連続プレーを観る際、「プレー」もしくは、「プレーヤー」に関して着目している点(以下、「局面別着眼点」)について明らかにし、ゲーム場面ごとに分類する。更に、ゲーム場面ごとの「局面別着眼点」を明らかにし、その特徴を考察する。
- ② 攻撃、防御に関して着目している側(以下、「攻防別着眼点」)を分類し、その特徴を考察する。

- ③ 「攻防別着眼点」において着眼した理由(以下、「着眼理由」)の特徴や傾向を見出し、分類を行う。そして、「攻防別着眼点」との関係性や特徴を考察する。
- ④ 「局面別着眼点」・「攻防別着眼点」・「着眼理由」の分析結果や、その考察から得た知見を基に、「観察チェックリスト」のモデル化を試みる。

また、「着眼点」の分類と「観察チェックリスト」のモデル化にあたっては、国際ラグビー連盟(以下、IRB)作成の「機能役割分析」を参考にしているため、5点目として、この分析項目について検討課題とした。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査上の手続き

ゲーム中、被験者の「着眼点」は、多岐にわたってあると考えられた。例えば、ボールの動き、プレー、プレーヤーの動き、プレーヤーの状況判断、レフリーのポジショニング、タッチジャッジ、試合の時間経過、得点、気象状況、などが挙げられる。

しかし、本研究では、被験者のゲーム中における「着眼点」についての特徴や、傾向を見出すことを目的としたため、着眼する要素に制限を加え、視点の分散化を防ぐこととした。具体的には、以下のような手続きを行なうこととした。

- (1) キック・オフから始まる連続した攻防場面に限定する。

様々に展開されるゲーム場面において、その始まりはキック・オフであるということから、キック・オフから始まる連続した攻防場面に限定した。

- (2) 15秒程度の連続プレー内で映像の視聴を求める。

試合時間の長さに伴い、ゲーム場面は多様に発生する。それによって、被験者の「着眼点」も多岐にわたり、「着眼点」の特徴や傾向をみるのが困難だと予想された。そのため、被験者には、15秒程度の連続プレー内で映像の視聴を求めた。

- (3) 「プレー」、「プレーヤー」、「攻防」のいずれかに着眼するよう求める。

ゲームの戦術や技術面を「観察」する上で、基本的な「着眼点」を「プレー」、「プレーヤー」、「攻防」のいずれかとした。従って、「攻防の地域」、「試合経過時間」、「気象状況」、「レフリー」などを着眼することにつながるような状況は排除した。

2. 調査期間・指導対象者・調査人数

調査期間・指導対象者・調査人数については、表1に示すとおりであった。

表1. 調査期間・指導対象者・調査人数

	第一調査	第二調査	第三調査
期間	2005年12月～ 2006年1月	2006年8月	2006年11月
指導対象者	中学生・高校生 大学生	大学生	高校生・ 大学生
調査人数	12名	8名	13名

3. 調査対象者

研究の意図に同意し、日頃、技術指導を行っている研究者によって認めることのできたラグビー指導者33名(以下、被験者)を選定した。

4. インタビュー方法と調査場所

本研究では、被験者にインタビュー調査を行った。ラグビーゲームにおける一部の攻防場面(以下、課題ビデオ)の映像を、パーソナルコンピュータもしくはビデオによって再生し、被験者は、それを二回続けて視聴した。その直後、8項目の質問に回答した。調査場所は、練習場・体育教室・遠征先のホテルのロビー・試合会場の本部室などであった。

5. 課題ビデオの内容

課題ビデオの映像は、東北一部リーグに所属する大学生同士のゲームとし、リスタート時のキック・オフから始まる攻防場面とした。また映像は、約15秒程度であり、2005年12月25日に行われた練習ゲームをハンディカメラで撮影し、録画した後、元高校生ラグビー監督経験を持つ指導者1名の協力によって、選択された。

6. 質問事項

インタビューにおける質問事項は表2に示す通りであった。質問1から質問7までを「着眼点」に関する質問とし、質問8を「着眼点」の質問とした。

表2. インタビュー調査の質問事項

質問1. 注目したプレーは何処ですか
質問2. 注目したプレーヤーは誰ですか
質問3. この一連の攻防における中心的な課題はどんなプレーですか
質問4. 課題ビデオを観察して最優先して取り組むべき課題はどんなプレーですか
質問5. 長期的な視野で改善すべきプレーは何ですか
質問6. 短期的な視野で改善すべきプレーは何ですか
質問7. 攻撃側か防御側のどちらに注目しましたか
質問8. 質問7の理由を教えてください

Ⅳ. 結果

インタビューによって行われた、8項目の質問に対する回答は、一人につき一回答を求めたが、被験者によっては、一つの質問に対して、複数の回答をしたため、総回答数は、284回答に及んだ。なお、課題ビデオ内の映像において、キック・オフ場面は、キッカーによってボールが蹴られてから、受け手がボールを保持し、走り始める時までとし、ラック場面は、ラックプレーに関してボールの争奪が起こっているプレーとし、サポート攻撃場面は、キック・オフ場面終了後からボックスのライン攻撃開始までで、特に攻撃側に視点をあてた場面とし、サポート防御場面は、キック・オフ場面終了後からボックスのライン攻撃開始までで、特に防御側に視点をあてた場面とした

(1) 「局面別着眼点」の分類

ゲーム局面毎の「局面別着眼点」は図1の通りで、ラック場面が多かった(全回答の約37%)。

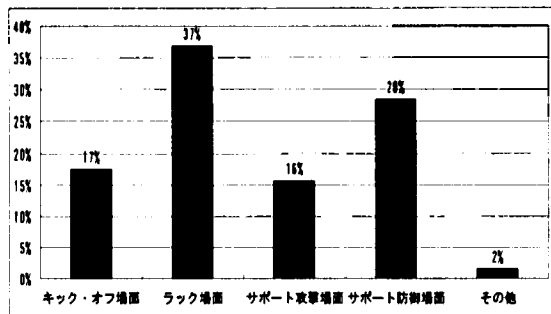


図1. ゲーム場面ごとの「局面別着眼点」

(2) キック・オフ場面の「局面別着眼点」

キック・オフ場面の「着眼点」において、回答数の最も多い「局面別着眼点」は、図2の通りで、「ボールへのチェイス」(約26%)であった。「ボールへのチェイス」とは、防御側のプレーで、ボールを追いかけていくプレーヤー達のことである。

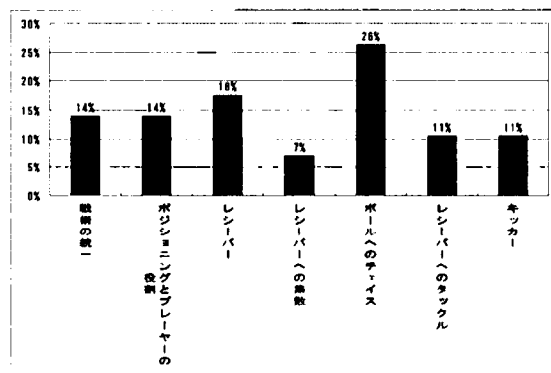


図2. キック・オフ場面の「局面別着眼点」

(3) ラック場面の「局面別着眼点」

ラック場面の「着眼点」において、回答数の最も多い「局面別着眼点」は、図3の通りで、「タックラー」(約44%)であった。「タックラー」とは、防御側のプレーで、ボール保持者へタックルするプレーヤーのことである。

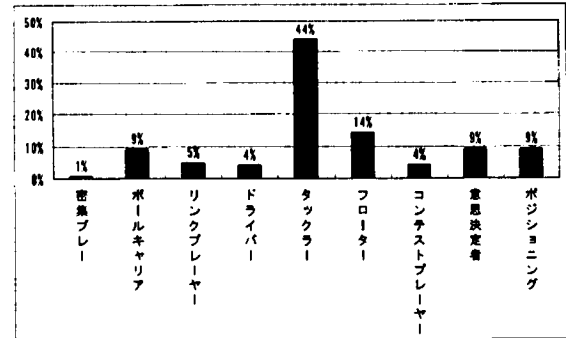


図3. ラック場面の「局面別着眼点」

(4) サポート攻撃場面の「局面別着眼点」

サポート攻撃場面の「着眼点」において、回答数の最も多い「局面別着眼点」は、図4の通りで、「ボールキャリア」(約51%)であった。「ボールキャリア」とは、ボールを持って、前進をしているプレーヤーのことである。

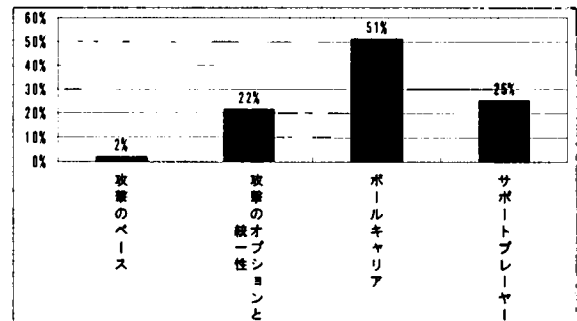


図4. サポート攻撃場面の「局面別着眼点」

(5) サポート防御場面の「局面別着眼点」

サポート防御場面の「着眼点」において、回答数の最も多い「局面別着眼点」は、図5の通りで、「ボール周辺のプレー」(約83%)であることがわかった。「ボール周辺のプレー」とは、ボールに直接関わっているプレーヤー達または、ボール周辺のプレーヤー達のプレーのことである。

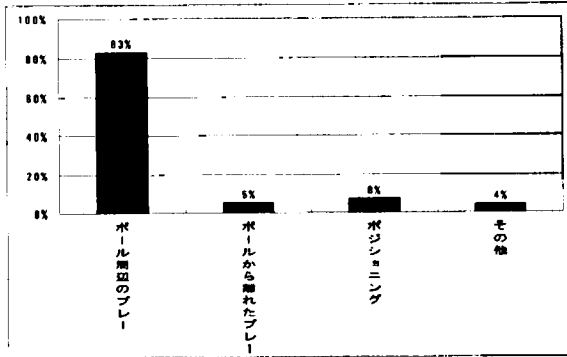


図 5. サポート防御場面の「局面別着眼点」

(6) 「局面別着眼点」の特徴

図 6 より、“複数のプレーや局面”を着眼した被験者 (61%) の方が“一つのプレーや局面”を注視した被験者 (39%) より多いということがわかった。

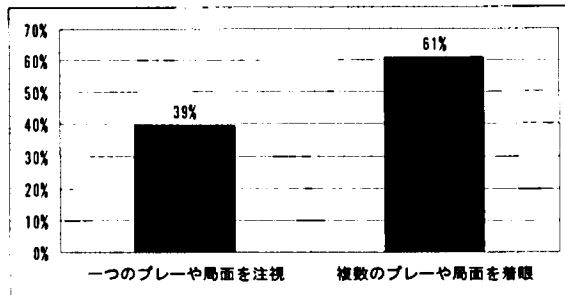


図 6. 「局面別着眼点」の特徴

次に、二つに分類された「局面別着眼点」の特徴を、被験者の指導経験年数ごとにそれぞれまとめた (図 7.8)。分類基準は、森ら⁽¹³⁾によって行われた指導年数の分類方法を参考にし、指導経験年数を、① 15 年以上の指導者、② 10 年以上 15 年未満の指導者、③ 10 年未満の指導者に分類した。この結果、指導経験年数 15 年以上の被験者における「着眼点」の特徴としては、複数のプレーや局面を着眼している被験者における割合のほうが高くなった (40%)。また、指導経験年数 10 年未満の指導者における「着眼点」の特徴は、“一つのプレーや局面”を注視している被験者における割合のほうが高くなった (62%)。

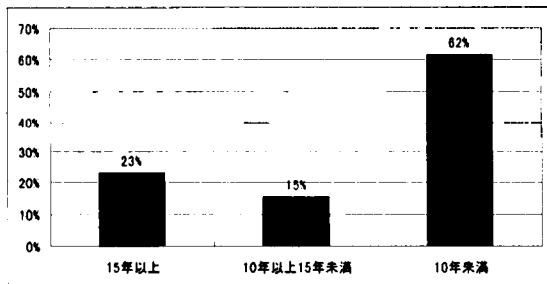


図 7. “一つのプレーや局面”を注視した被験者の指導経験年数

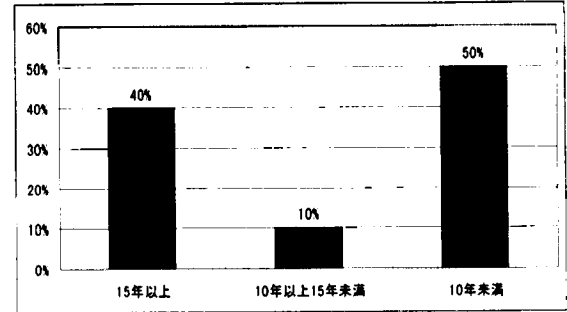


図 8. “複数のプレーや局面”を着眼した被験者の指導経験年数

(7) 「攻防別着眼点」の特徴

図 9 より、防御側を着眼した被験者の割合が最も高く、全被験者の約 55% (18 名) ということになる。

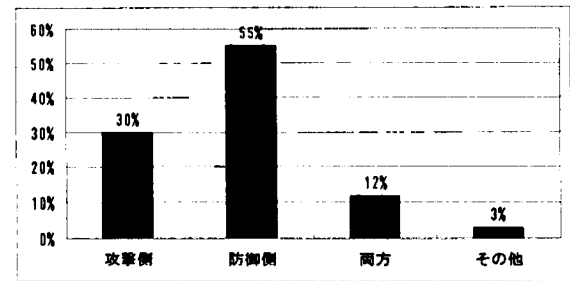


図 9. 攻防別着眼点」の特徴

次に、「攻防別着眼点」を被験者の指導経験年数ごとにまとめ、検討した。分類基準は、「局面別着眼点」の特徴を分類した指導経験年数と同類の方法を用いて分析を行った。なお、両方のチームを着眼していた被験者と、どちらも注視せず観ていた被験者は、分類された被験者数が少なく、比較することが困難であると考えられたため、分析対象とはしなかった。この結果、攻撃側を着眼していた被験者の多くは、指導経験年数 15 年以上であった (60%)。また、防御側を着眼していた被験者の多くは、指導経験年数 10 年未満であった (67%)。

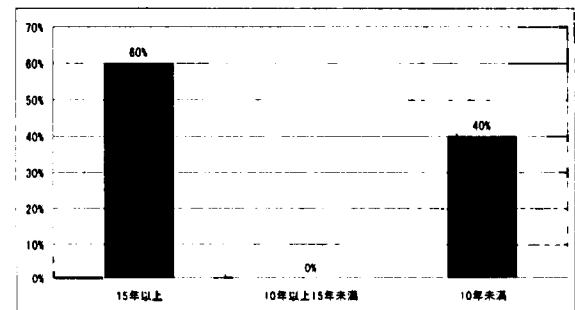


図 10. 攻撃側を着眼した被験者の指導経験年数

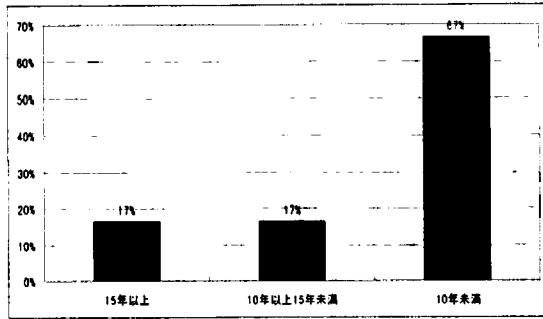


図 11. 防御側を着眼した被験者の指導経験年数

(8) 「着眼理由」

表 3 の結果、防御側を着眼し、かつ“自らの指導方針を持って観ている”被験者の割合が最も多く、全被験者の約 18% であった。一方、攻撃側を着眼していた被験者の「着眼理由」において回答人数の差はみられず、特徴を見出せなかった。

表 3. 「着眼点」の分類 () 内は (%)

「着眼理由」	防側	攻側	両方	その他	合計
自らの指導方針を持って観ている	6(18)	2(6)	0	0	8(24)
戦術的意図を観ている	3(9)	2(6)	1(3)	0	6(18)
悪い点・課題点を注視している	3(9)	2(6)	1(3)	0	6(18)
自チームと比較して観ている	4(12)	0	1(3)	0	5(15)
良い点を注視している	0	2(6)	0	0	2(6)
観るプレーや局面を決め着眼している	2(6)	1(3)	0	0	3(9)
その他	0	1(3)	1(3)	1(3)	3(9)
合計	18	10	4	1	33(100)

V. 考察

以上の結果を基に考察したところ「局面別着眼点」において、コンテスト局面に、加わっているプレーヤー達に着眼し、この局面におけるボールの争奪を中心に、ゲームを観ていた。また、「攻防別着眼点」と「着眼理由」については、防御側を「攻防別着眼点」とした被験者は多く、自らの指導方針を持って観ていた。これより、防御側は“何を観ればよいのか”や“何から観れば良いのか”ということが体系化しやすいといえた。

一方、攻撃側を着眼した被験者の「着眼理由」は、特徴を見出せなかった。これより攻撃側は、様々な関連要素によって構成されていて、単純にプレーの評価を行うことは、困難であると考えられた。更に分析結果より得た知見を基に、「観察チェックリスト」のモデル化を試みたところ、指導者のゲーム中の「着眼点」における「項目立て」を行うことが出来た(表 4)。また、IRB 作成の

「機能役割分析」は、攻・防場面のみでの分類であったが、攻防が切り替わる場面も加えた表を作成した。

表 4. 「観察チェックリスト表」

		年月日(観戦相手)	大会名	天候	記録者
攻防		「局面別着眼点」		評価(コメント)	
	攻撃側	戦術の統一性はとれているか 密集プレーの人数は増えているか 攻撃のペースは速いか ボールキャリア リンクプレーヤー ドライバー フォワードの意思決定者 オフザボール局面のプレーヤー達の動きはどうか キッカー (キックに対する)レシーバー レシーバーへの集束			
防御側	キックオフのポジショニングは適切か キックオフ時、選手は適切な役割を果たしているか オフザボール局面のプレーヤー達の動きはどうか タックル コンテストプレーヤー フローター (キックに対する)ボールチェイス				
切り替わる場面	ポジショニング				

VI. 総括・今後の展望

本研究は、指導行動の原点である「観察」に焦点化した。特に指導現場において、競技者の技術や、戦術の向上を目的とし、観察しているラグビー指導者の「観察視点」について調査した。具体的な研究方法としては、課題ビデオを用いた、インタビュー調査をラグビー指導者に行い、その結果、ゲーム中の着眼点や、映像内の一つの場面を着眼した理由など、「着眼点」における多くの知見を得ることができ、その特徴を明らかにすることができた。これより本研究は、多くのラグビー指導者の「観察力」を向上させる、基礎的な資料になると考えられた。

今後の展望としては、被験者を増やすことが考えられた。本研究は 33 名のラグビー指導者を対象にインタビュー調査を行ったが、更に多くの指導者への調査を行うことで、より明確な「着眼点」の特徴や傾向を見出せると考えられた。また、他競技の指導者への調査を行うことも考えられた。

ラグビーゲームは、本研究で使用した課題ビデオ以外の攻防パターンや、アウトオブプレー場面などの様々なゲーム場面から構成されており、それぞれのゲーム場面における「着眼点」の調査をする必要もあった。

更に、「プレー」「プレーヤー」が混在しているため、それぞれに分けて、再調査する必要も考えられた。また、

ゲーム中、指導者の「着眼点」は技術や戦術面以外の「着眼点」もあるため、本研究で調査した「プレー」「プレーヤー」「攻防」以外の「着眼点」も調査する必要があった。

また、被験者の指導対象者・指導実績など、「観察力」を構成すると考えられる要素について、本研究では分析を行っていなかった。よって、キッズ指導者、ユース指導者、エリート指導者といった、年齢別のカテゴリーに分類し、ゲーム中の「観察力」を調査することや、「指導実績の高い指導者」の定義化を行った上で、ラグビー指導者の「指導力」と「観察力」、さらには、「評価能力」といった、「観察力」と関連するラグビー指導者の能力について、調査を行うことができると考えられた。それは、「観察力」の新たな知見となり、「指導能力の高い指導者」におけるゲーム中の「観察視点」について様々な検討を行えると考えられた。

また、考察として、多くの知見から作成を試みた「観察チェックリスト」は、攻撃側・防御側における「着眼点」の項目立てを行った。しかし、ラグビーにおいて重要なゲーム場面の一つであるターンオーバー場面の「着眼点」は、ほぼ抽出できなかつた。この要因の一つとして、課題ビデオの映像や質問事項の内容が、考えられた。よって、ターンオーバー場面の映像を用いた「着眼点」の調査を行う必要があった。

Ⅶ. 参考・引用文献

- 1) ブライア・ジョーンズ、イアン・マックジェネット、ブライアン・ドブス著 大西鉄之祐、小杉正太郎訳 (1980) ウェールズの実践的ラグビー、ベースボールマガジン社. p. 28.
- 2) 長谷川悦示・高橋健夫・浦井孝夫・松本富子(1995) 小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み、スポーツ教育学研究. 14 (2). 日本スポーツ教育学会. Pp. 91-101.
- 3) 日比野弘・松元秀雄・山本巧 (1994) ラグビーの作戦と戦術、早稲田大学出版部.
- 4) 平尾誠二監修 (2005) キリカエ力は指導力、-常識も理屈も吹っ飛ばすコーチング、梧桐書院. p. 22.
- 5) ジム・グリーンウッド著 江口昌佑・川島淳夫・河野一郎・中川昭訳 (1991) シンク・ラグビー、ベースボールマガジン社.
- 6) ジム・グリーンウッド著 江口昌佑・伊与田康雄訳 (1980) 新装版、トータルラグビー、コーチと選手のための15人ラグビー、泰流社. Pp. 43-56.
- 7) 金子明友・朝岡正雄著 (1995) 運動学講義、大修館書店. Pp. 156-163.
- 8) 勝田隆 (2002) 知的コーチングのすすめ、大修館書店.
- 9) 勝田隆 (2006) 指導者のためのスポーツジャーナル. 267. 16. スポーツ指導者とは、-プレーヤーとのコミュニケーション-、日本体育協会. p. 17.
- 10) リー・スミス著 川島淳夫訳、コーチ講習会、ワークブック、レベル2、国際ラグビー連盟.
- 11) リンダ・グリフィン、ステファン・ミッチェル、ジュディ・オスリン著 高橋建夫・岡出美則訳 (1999) ボール運動の指導プログラム、-楽しい戦術学習の進め方、大修館書店. Pp. 82-154.
- 12) 松田岩男編 (1976) 運動心理学入門、大修館書店. Pp. 294-301.
- 13) 森博文・北川隆・廣瀬勝弘・坪井信道 (2000) 体育授業観察者の「思考」に関する研究、スポーツ教育学研究. 第20巻2号. Pp. 65-76.
- 14) 小野剛 (1999) 世界に通用するプレーヤーの育成のためのクリエイティブサッカー・コーチング、大修館書店. Pp. 170-184.
- 15) 高橋健夫・長谷川悦示・日野克博・浦井孝夫 (1996) 体育授業観察チェックリスト作成の試み、観察者の評価視点の構造を手がかりに、体育学研究. 41. 3. 日本体育学会. Pp. 181-191.
- 16) 高橋健夫 (2002) 教師の専門的力量を高めるための授業研究、体育科教育 2002年9月号、大修館書店. Pp. 10-13.
- 17) 瀧井敏郎 (1989) ゲームの運動観察、-サッカーにおける写真によるゲームの運動観察-、スポーツ運動学研究. 2. 日本スポーツ運動学会. Pp. 23-34.
- 18) 吉井四郎 (1995) バスケットボール指導全書Ⅰ、コーチングの理論と実践、大修館書店.
- 19) 財団法人日本ラグビーフットボール協会 (2006) 平成17年競技規則、日本ラグビーフットボール協会.
- 20) 財団法人日本体育協会 (2005) 公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅳ、日本体育協会. p. 3.

〈 課題ビデオ映像の写真 〉

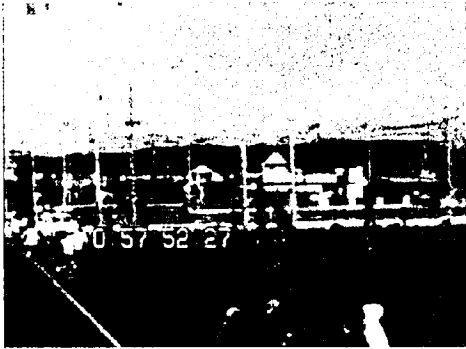


写真 1. キック・オフ (課題ビデオ開始)



写真 5. ラックからサイド攻撃場面の攻防



写真 2. ボールをレシーブした場面 (キックオフ場面)



写真 6. タックル発生



写真 3. タックル発生

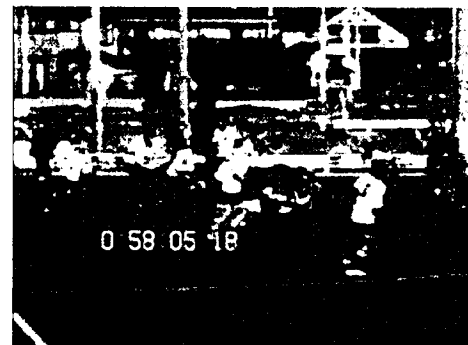


写真 7. コンテスト局面 (ラック場面)



写真 4. コンテスト局面



写真 8. 二次攻撃の発生 (課題ビデオ映像終了)